

スマホはパンドラの箱を開けた

（底にあるのはへドロの悪意）

須磨貴美子

1 スマホPTSD

怖い。

怖い。

スマホが、こわい。

今日は2月の月曜日。体がだるい。体中の力を振り絞って、自分のPCからでも見られる事務所のスケジュールを見る。今週は特に急ぎの案件はなさそう。明日は祝日。スマホが怖くて電車に乗れない。今日は事務所を休もう。

先週の金曜日、知らない人からなんか言われたからって、PTSDになっちゃだめっすよー、と工藤先生に言われた。でも、なっちゃったよ、先生。

先週木曜日。複数の持病を抱える私は、帰りの都営浅草線で、優先席に座っていた。優先席といっても、少なくとも私の見たところ普通に皆元氣そうだ。皆平気でスマホをいじっている。

私は、とりあえず、前のスマホを視野からシャットダウンしようと、1枚のA4のレポート用紙を入れたクリアファイルをスマホシエルターとして頭の上から目の前にかざす。レポート用紙にはこう書いてある。

「1件、傷害罪で告訴中。

スマホ、一定条件でやめないと

犯罪になる

可能性あり。

電磁波は関係なし。

総務省は不正確。」

スマホはパンドラの箱を開けた

私は、白紙にメッセージを書いてセロテープで貼りつけてあるバッグを膝に置いて文庫本を読んでいた。片手がスマホシエルターを持ちあげるのにとられちゃってるので、文庫

本しか読めないのだ。そうかといって、寝ると、首が下に垂れるから後頭部から頸椎のあたりが痛くなるし。自然に、読む物は検事ものか法廷ミステリーになる。バッグに貼りつけた紙にはこう書いてある。

「電気機器、スマホ等、閉じてください。」

ひどい頭痛が起ります。

肝がん、リユーマチもあり。

弱者イジメのスマホ濫用、許すものか！」

私のスマホシエルターでは、前の視界は遮れるけど、隣の乗客のスマホの画面は斜めから目に突き刺さる。とたんに、頭がずきずきと痛みだす。

2 スマキチの恐怖

先週木曜日。スマキチが隣にすわった。例にもれず、平気な顔で躊躇なくスマホをいじっている。私のバッグに貼りつけたスマホ閉じお願い書も顔の前にかざしたスマホシエルターも完無視。まっすぐ優先席にスマホを見ながらやってきてそのまま座った。私はいつものとおおり、お願いした。

「あおう、私、その画面で頭痛が起るので、しばらく閉じていただけませんか？」

相手は、私の体感確率ではお願い相手の15%くらいと思われる依存症超危険スマキチの一人だった。去年の12月、私が有名な精神科医に大枚はたいて自分の症状を相談した時に、医者は、スマホ常用者の10%〜20%は依存症だと言っていた。スマホゲーム依存はWHOから疾病、要するに治療が必要な中毒症、とされている。精神科医の言っていたスマキチの割合と、私の体感確率はほぼ一致する。だいたいこのくらいの割合だ、怪獣のようなスマキチは。

このスマキチは髪に白いものが混じったおそらく50代くらいの男だった。私の体感確率では、一番酷いスマキチは大体これくらいの男性。なにか理由があるのだろうか。

私の言葉に、スマキチの攻撃が始まった。

「電磁波じゃあねえだろう」

はあ？ あなたの行為で体調不良がひどくなるという症状、すなわち、結果が問題なんじゃないんですか？

「お前のキンキンした声が気に入らねえんだよ」

親からもらった声なんですから今更変えられません。

「おれにこれを閉じろって言うんならお前も本を閉じろよー！」

何言ってるんですか、あなたが何をみていようが問題じゃない。私はあなたのスマホの画面が目に入ってくると頭痛が起こるんです。優先席なんですから、体調不良を起こす人に配慮してください。ほんの数十分そのおもちやを閉じる極めて容易な行為じゃないですか。

「医者診断書見せろよ」

「お前も本を閉じるんだよー！！」

そう言っつて、スマキチは、私の文庫本に手を伸ばし、無理やり閉じようとした。その時、スマキチの手が私の右手の甲にあたった。

最寄り駅で降りて、自宅までおよそ10分歩いている間に、私の脳裏に閃くものがあった。「医者診断書見せろよ」は、義務のないことをやらせようとした行為だから強要未遂だ。スマキチが私の文庫本を無理に閉じようとして私の手に触れたのは暴行だ。私はいつも通勤電車の中で録音機を回しているから、スマキチの手が私の手の甲に触れた瞬間、「あてましたね。暴行ですよ」といえばそれが録音され、スマキチを告訴するときに証拠になるはずだった。

去年の5月、暴行の誹りを受け、被害者から立派な前歴者に転落した私なら、いくらスマキチの猛攻の最中で呆然自失だったとはいえ、思いついて当然のことだった。弁護士なのに、それくらいの機転も働かないなんてー。私は強要と暴行が頭に浮かばなかったことの方が悔しくなった。刑事弁護に手を染めるつもりなんてまったくないが、これくらいのことまでてこないなんて、弁護士失格だ。

でも、と私は考えた。少なくとも暴行罪での告訴はできたかもしれない。あの瞬間、電車内のSOSボタンを押し、暴行被害に会ったと伝え、最寄りの駅で警察官に待っていてもらう。録音テープが一応の証拠にはなるだろう。しかし、スマキチは抵抗するだろうか。京成八幡駅あたりで電車を止めて遅らせることになる。そして、何よりも、私には痴漢犯罪と違って味方がいない。皆スマホをいじりたがっているのだし、何よりも早く帰宅したいだろう。それに、去年経験したことだが、京成線の職員は警察官の臨場には非常に消極的だ。都営浅草線はそうでもないのに。警察官にしても、目の前で誰かが誰かを殴ったような簡単な事件なら調書作成点数を稼ぐためかどこからかわらわらとわいてくるのに、そうでもないケースはまったくやる気がない。本当に何もしない。刑事訴訟法の告訴に関する規定が泣くくらいに。そして、たとえ、駅事務所かどこかに連れていってもらって話を聞いてもらえても、1〜2時間は拘束される。あの時はもう8時半を回っていた。翌日

金曜日、私には朝一番で東京地裁の期日が入っていた。それも午前中2件も。事務所に寄らずに翌日は自宅から東京地裁に直行する予定だったから、私は、分厚い案件ファイルを2冊抱えていた。本来、案件ファイルを事務所と裁判所の間以外で持ちだしたくはないのだが、朝一番で期日が入っている場合はしかたがない。民事裁判の期日なんてこれこそ1分もかからず終わるから、遅刻は許されない。もし私の頭に車内で暴行の2文字が浮かんでも、スマキチから、「勝手にどろぞろ！」と怒鳴られるのがオチで、結局のところ結果は今と変わらなかったらう。

と、私は、意識のありっただけで自分にまわりつく悔しさを包み込み、自宅へ向かった。

3 立派な前歴者に転落

そもそも、私がこんな状態になったのは、2018年夏に、最寄り駅の改札近くで歩きスマキチに正面衝突されたことが原因だった、と思う。だって、それまでは平気だったから。もともとPCの類の画面は好きではなく、しばらく見ていると頭痛がしてくるから、事務所ですりサーチのためサーフィンをしても途中から画面送りに堪えられなくなって紙媒体印刷モードに切り替えるとしてもだ。私はスマホは持つてはいるが、電話と親の安否確認のメールと裁判所で次回期日を決めるときのスケジューラーの確認にしか使わない。それでも、あの時までは、誰がスマホをいじっつていようが、歩きスマホをしていようが、気にならなかった。

だから、やっぱりあの衝突事件だ。私は肝細胞にできたがんを開腹手術で治療してもらった。そのためにいわゆるビキニの着られない体。胸の間から臍まで縫合跡が残っている、というか、もう臍はない。若いお嬢さんなら将来を悲観するところだろうが、もうそんな年でもない。縫合跡はくっついていてはいつてもやはり何らかの痛みは残る。私の場合は、びりびり、ちくちく、特に寒い日や雨の日など。縫合跡を触られるとびりっと痛みが走る。あの時は、まさしく縫合跡に何かがぶつけられたのだった。歩きスマキチの持っていたスマホが当たったのか、それとも他の硬いものが当たったのか、わからない。歩きスマキチは平然と立ち去った。もうよくは覚えていないが、平日だったと思う。夏で、薄い服装だったはずだから、ピリッという痛みが縫合跡を上から下へ走った。あまりの激痛で、壁のほうへ移動してしばらくしゃがんでいた。そのそばを、京成電鉄の職員が何人も通り過ぎていった。ひとりとして私に話しかけてくれる職員はいなかった。

この時からだ、私の、たった一人の、スマスマとの戦いが始まったのは。

2019年4月、私は今までのスマスマとの戦いの中で最も悪質なスマキチに出会った。

私の、頭痛が起こるからスマホを閉じてくださいという頼みに次々と大声で罵声が降りかかる。

スマホを暫く閉じていただけませんか？

「嫌です」

「お前今更何言ってるの？ 電磁波はあ、もうカンケーねーの。20年前の話をしてるんだよお前は」

「証拠見せろよ、証拠。医者診断書見せろよ」

「俺がこれを辞める理由はないっつーの」

「お前にそんなこと言う権利はねーの！ ふざけんじゃねえよ！」

耳元でガンガン鳴り響く罵声と相まって、私の後頭部は、ズキズキと、動脈のリズムに合わせて波を打って痛みだした。倒れそうになって、私は、電車内のSOSボタンを押した。

電車は京成八幡駅で止まり、私に続いてスマキチが降車した。各々が別々に駅員から事情聴取を受けた。スマキチのでかい声は、ひたすら私がうるさいことを言った、自分は何もしていないとの自己弁護に終始していた。スマキチの大声が私の頭に突き刺さる。私は、警察官に来てほしいと駅員に頼んだが、何故か、無視された。

電車内での会話は録音してあったから、後日、私は、診断書なども添付して、被疑者不詳でこのスマキチを傷害罪で告訴した。暴行を伴わない傷害はどの刑法各論の教科書でも認めている。判例としては、有名な騒音判例がある。この事件は、1年超にわたって隣家に向けてラジオ等の音声を流し続けたため隣家の1人がノイローゼになった事件だった。傷害が起こる機序は人それぞれである。あの事件では、ノイローゼになるまで時間がかかった。しかし、私の場合はスマキチのスマホを操作し続けるという行為と継続的な罵声で短時間で頭痛が酷くなったというものだ。スマキチの行為と私の頭痛の因果関係は私の体が一番よく知っている。警察が取り上げてくれさえすれば、私は弁護士をつけ、騒音判例の射程を広げるべく必死で戦うつもりだった。

通常、告訴状は、警察署のみに提出する。しかし、私は、敢えて、東京と千葉の地方検察庁にも告訴状を送った。スマホに関してこんな問題が起こっていることを司法機関に知ってもらいたいという思いからだ。市川警察署へは一度赴いて5時間ほど状況を説明した。このことで、私は警察が興味を持ってくれるのではないかと若干期待したが、警察は犯人がわかっていないと告訴を放置すると常々人から聞いていた通り、1年近くたった現在まで梨のつぶてである。東京・千葉の両検察庁は、何の反応もなくただ告訴状を私に返還してきた。刑事訴訟法上は、告訴を受ける主体は検察官になっているのに、である。

2019年5月ゴールデンウィーク前半。私の隣のスマキチの原色のものすごい画面が目に入るのに悩まされた私は、スマキチに、閉じてくれるようお願いした。スマキチは聞こえないふり。スマホゲームをやり続けていた。私はたまたまその時、片手にチラシが1〜2枚入ったクリアファイルを持っていた。これがいけなかった。迂闊としか言いようがない。スマキチは電車のドアの近くの席に座っていたので、無意識に、私の手が、最寄り駅で降車する直前にスマキチの手の甲をポンッと叩いてしまったのだった。スマキチは、「暴行だあ！」と叫び続け、こういう簡単な事件は大好きな警察官がどこからともなくわらわらと湧いてきた。結果的に、私は、警察署に5時間拘束されて、暴行罪の嫌疑で調書をとられ、れっきとした前歴者に転落したのだった。今になって振り返れば、あの時とつさに「暴行」の2文字がごく自然に出てきたということは、あのスマキチは、法律の素養のある人間か、似たような経験のある人間かだったのかもしれない。被害者を加害者にしてこれほど嬉しいことはなかったでしょうね、スマキチさん。

4 スマコの恐怖

スマキチはとにかく上から目線の男尊女卑思想を剥き出しに怒鳴り続けてくるが、スマコも負けてはいない。スマコの場合、最もスマホ依存性の割合が高いと私が感じるのはスマキチより若干若く、30代中後半〜40代くらいである。

何か月前、隣でスマホゲームに熱中していたスマコに声をかけられた。どうも、以前私がスマホのお願いをした方らしかったが私のほうはすっかり忘れていた。ご本人は相当悔しかったのだろう、私の顔をしっかりと覚えていたらしく、何の躊躇もなく私に話しかけてきたということは。

「あら、今日は偽の弁護士バッジはつけてないのねえ」

わざとスマホを閉じるところを私に見せながらスマコは言った。かちんときた私は言うてやった、怒りを抑えて静かに。

「偽の弁護士バッジという言葉は事実の摘示だから、今おっしゃったことは弁護士である私への名誉棄損ですよ。」

私が最寄り駅近くになってバッグを開けたときにスマコはバッグの中の私のスマホの片鱗を見たらしい。私にわざと聞こえるように、「何、この人、スマホ持ってるじゃん」とつぶやいた。あのねえ、所持と使用と濫用は違うでしょ。

その後、私が最寄り駅で降車する時、スマコは、私に聞こえるように、「よしっ」と声を上げてスマホをいじり始めた。

でも、これ、変じゃない？ 私がいるかないかの問題じゃない。相応に混んでいる帰りの通勤電車の電車内。優先席の後ろの窓には、「混雑時には電源を切りましょう」のス

テッカーが貼ってある。どうして、自分がいる状況を考えられないのだろう。スマホに魂まで奪い取られてしまったのだろうか。

5 駅員さえもスマスマの見方

2019年2月。私は、優先席のスマホ使用をなんとかできないかと、最寄り駅の改札口横の駅員窓口に相談に行った。高山氏という40代後半〜50代くらいののがっしりした体格の駅員が対応したが、その口からはこれが駅員の言うこと？と信じられない毒虫のよきな言葉が立て続けに飛び出した。

(コートにつけた私の弁護士バッジを見て)「弁護士バッジなんて一般の人は知らないでしょ？」

それくらい言われなくてもわかっています。弁護士バッジをつけるのは裁判所の期日が入っている日だけです。

「混雑時には電源を消してくださいというのはあくまでもお願いベースであって、お客さんが電源を切らなければそれまでだよ。優先席だって、その程度以上の意味はないよ」

(私)「それならなぜ、優先席を分けたんですか？弱い者を保護するという発想からではないのですか？」(回答なし)

「あなたはテレビは見るんでしょう？なんでスマホの光なんかで頭痛が起こるの？」

朝天気予報を5分「聞く」くらいですよ。

「優先席なんてさあ、任意なの。お願いして断られたらそれでお、わ、り！」

悔しくて、私は、京成電鉄の社長あてに手紙を書いた。普通の会社なら、少なくとも紋切り型の返事くらいよこすものだが、ここからは何の書面も来なかった。この会社にして、あの駅員か。

6 スマスマが開けたパンドラの箱 スマホの害は研究されてる、でも間接被害は？

今までのスマスマとの戦いに、正直、私は疲れ果て引きこもり気味になっている。鬱状態だ。ただ、私と同様の症状を有するという方が他にもいることには少し励まされた。今まで、電車の中で、「私も同じ症状があるんです」「辛いけど頑張りましょうね」という会話を何度か交わした。

スマホのスマスマ自身に対する害についてはそれなりに研究され、出版物も出ている。脳の稼働分野が縮小する、成績が悪くなる、などなど。WHOもスマホゲーム依存を疾病と認定した。しかし、スマホの、第三者に対する害に関する研究は私は寡聞にして知らな

い。過去に一度、何気なく一般席に腰を下ろしたことがあった。周り中スマホをいじっていてスマホの光がぐるっと270度の角度から私を襲ってくるのに気付いた瞬間体中に火がついたような感じがして、私は優先席の方に逃げ去った。私のスマホフォビアは決して心理的な問題だけじゃない、これはその時の私の直感だった。

しかし、スマホの裏には大企業がいる。政府は5Gだのなんだのではしゃいでいる。平成25年に、総務省が、携帯電話に関する指針を改定したことにより、電鉄会社は、それまでは、携帯電話の使用マナーとして「優先席付近では電源を切る」よう案内を行っていたが、同年の総務省による指針改定を受けて、「優先席付近では混雑時には携帯電話の電源を切る」案内に変更した。この変更が、マスコミによって、携帯電話からの電磁波はペースメーカーに影響しない、とミスリーディングに報道されたことから、国民の多くが、「優先席で携帯電話（スマホ）の電源を切るのはペースメーカー使用者のためだけである。ペースメーカーに影響がないと判明した以上、優先席付近でも、携帯電話（スマホ）の使用は自由である」という誤解を有することとなった。そして、この誤解により、ペースメーカー植込み者ではない、電磁波以外の理由で、第三者による電車内でのスマホの濫用が体調不良を生じる私のような、少数の目に見えない障害を有する者にとっては、地獄にいるような状況の中で生計を維持するための通勤を強いられることになった。事實は、スマホについては、総務省は平成29年3月に初めて報告書を出しているのである（総務省「電波の医療機器等への影響に関する調査」平成29年3月）。さらには、この報告書の中でも、平成25年の指針改定後も、「ペースメーカーなどの植込み部位から携帯電話まで15センチ程度離すこと」が推奨され、一部の国では、より厳しい値を設定していることが紹介された上で、通信技術の進歩に沿った継続的な調査が必要とされている。

スマスマは増殖を続けるだろう。携帯からスマホは直線的な進化ではなく、私は両者の間には断層があると思う。その先に何があるか。私には、スマスマの増殖した社会が幸せな社会とは決して思えない。自動車はなくては困るけれど（だから自動車の存在を否定できないことを前提にいろいろな規則があるのだけれど）、スマホがなくても少なくとも私は別にかまわない。

私の症状は、スマスマの心の中のパンドラの箱を開けて人間のナマの心の底を私に見せた。箱の底には、ヘドロのようにどす黒い悪意がへばりついていていた。

私はスマスマが怖い。

でも負けたくない、ゴーレムのおもちゃなんかに。